

國分功一郎 『中動態の世界』

國分功一郎，2019，中動態の世界——意志と責任の考古学，株式会社医学書院，東京．



図1 スピノザが構想する世界は中動態だけがある世界である

第 I 部

章レベルの要約

第 1 章から第 6 章までは各章の内容が次の章の冒頭で簡単に要約されている。

第 1 章 能動と受動をめぐる諸問題

§ 1

「私が何ごとかをなす I do something」と表される事態・行為も実際には私がそれを自分の意志でもって遂行しているとは言いきれず、むしろ正確には「私のもとで事態・行為が実現されている」のである。

§ 2

このような事態・行為は能動態・受動態のいずれでも表せない。

これは能動と受動が意志という曖昧な概念に基づいているからではないか。というのも、能動は意志を強調する形式であり、受動はそれをひっくり返したものに過ぎない。そして意志は、自分や周囲の条件を意識していると同時にそこから独立に判断を下せるという矛盾した概念である。

§ 5

能動と受動の区別はわれわれの思考のなかでまるで必然的な区別であるかのように作用している。これはわれわれの言語が能動態と受動態を対立させるものであることに由来する効果ではないか。

ところが実は多くの言語が能動態と受動態の区別を知らない。また能動態と受動態の区別は新しく、かつては能動態と中動態が対立していた。

第 2 章 中動態という古名

§ 1

インド＝ヨーロッパ語にもともとあったのは能動態と受動態の対立ではなく、能動態と中動態の対立であった。受動態は中動態から派生しており、受動は中動態がもちうる意味の 1 つに過ぎなかった。「能動態」と「受動態」の間にあるかのような「中動態」という名称は中動態の歴史に矛盾する。

§ 4

トラクスの『文法の技法 (テクネー)』は、おおむね 18 世紀まで文法の標準的教科書として利用された現存する最古のギリシア語の文法書である。『テクネー』において動詞の態は「エネルゲイア」「パトス」「メソテース」の 3 つに分類されている。これらはそれぞれ「能動態」「受動態」「中動態」と翻訳され、能動態と受動態の対立に続く中間的なものとして中動態が位置づけられるものと見なされた：

エネルゲイア	↔	能動
パトス	↔	受動
メソテース	↔	中動

§ 5, § 6, § 7

しかし言語学者アンダーセンは「エネルゲイア」と「パトス」がそれぞれ能動態と中動態を指しており、メソテースは例外を指すという見解を示した：

エネルゲイア	↔	能動態
パトス	↔	中動態
メソテース	↔	例外

『テクネー』は能動態と中動態を対立させるパースペクティブのなかで書かれたのかもしれない。

第3章 中動態の意味論

§ 3, § 4

中動態……動詞の示す過程の内に主語が位置づけられる事態を指す
 能動態……動詞の示す過程が主語の外で完遂する事態を指す

§ 7

能動態と中動態の対立において、意志の観念は前景化しない。

第4章 言語と思考

バンヴェニストによれば、言語が思考を規定するとは言えないけれども、現実の社会や歴史を通して言語は思考に作用する。そうであれば古代ギリシアにおいて中動態が存在したと意志概念が存在しなかったことの間に、何らかの関係を見出せる可能性がある。

第5章 意志と選択

§ 3, § 4

アレントは『精神の生活』において意志を過去から切断された絶対的な始まりとして定義し、過去からの帰結である選択から区別した。

[※これは意志の定義というよりは、むしろ自由意志の定義となっているように思われる.]

§ 5

これは意志のすぐれた定義であるがゆえに、意志というものが存在できないことまでも暴いてしまう。しかしアレントは意志を擁護し、意志概念を批判してきた哲学の歴史そのものを否定する。

§ 6, § 9, § 10

アレントは同意を自発的なものとして位置づけることにこだわったため、カツアゲにおいて見られるような非自発的同意をうまく位置づけられなかった。これは自発か強制かという図式、あるいは能動と受動を対立させる図式では非自発的同意を捉えられないことを意味する。

§ 7, § 8

フーコーの権力理論によれば、権力を行使する者は権力によって相手を行為させるのだから、行為のプロセスの外にいる。これは中動性に対立する意味での能動性に該当する。権力によって行為させられる側は、行為プロセスの内にいるのだから中動的である。このようにフーコーの権力理論は「中動態」という用語を用いてはいないものの、中動態をめぐる図式をそのなかに内蔵しており、非自発的同意のもとにある行為を記述することに成功している。

第6章 言語の歴史

言語の歴史を次のように憶測できる。

1. 名詞的構文
→ 非人称動詞 (出来事そのものを記述)
→ 中動態
2. 中動態 → 能動態
能動態と中動態の対立 (行為者が動作プロセスの内側にいるのか外側にいるのかを問う)
3. 中動態 → 受動態
能動態と受動態の対立 (行為者が自分でやったのかどうかを問う)
4. 中動態の抑圧・消失
自動詞、再帰表現、使役表現等々への継承

第7章 中動態，放下，出来事——ハイデッガー，ドゥルーズ

ハイデッガー

§ 1

ハイデッガーは自らが「転回」と呼ぶ態度変更の後、執拗に「意志 Wille」を批判するようになる。ハイデッガーの意志批判は彼のニーチェ研究と関係していると考えられる。

§ 2

ハイデッガーは以下の点に意志概念の問題点を見出す。すなわち、絶対的始まりである意志を求めることは過去を忘れようとし回想を放棄することであり、従って思考を放棄することである。さらに言えば、意志はどうにもできない過去を憎むことである。

§ 3

意志を強烈に批判するようになったハイデッガーは「意欲しないことを意欲すること」を目指す「放下」というキーワードを用いる。ハイデッガー『放下』の対話篇では、能動と受動を対立させるパースペクティヴが意志の概念に直結し、「放下は能動性と受動性の区別の外部に横たわっている」とハイデッガーが見ていることが窺える。実際、「時熟する」「世界が世界する」「無が無する」「言葉が語る」「空間が空間する」「ものが世界をものする」といったハイデッガーの謎めいた言い回しは、“The book sells”のような、抑圧された中動態の回帰としての中間構文(第6章§ 9, p.194)を強く想起させる。

ドゥルーズ

§ 4

表層で起こる変化(例:「雨が降る」)は2次的なものであって、変化がその上で起こるところの「実体」(例:大気)をこそ考察の対象としなければならないとする考え方においては、実体を名指す名詞こそが特権的な地位に置かれる。それに対しドゥルーズは、実体(例:肉)と実体に起こる出来事(例:切り裂かれた)とを等しく扱うストア派の哲学に注目した。

§ 5

「行為する者」と「行為を被る者」という「物体的本性」を前提としなければ、本来、出来事とは能動的でもなければ受動的でもない。そのような出来事は動詞によって表現される。

ライブニッツによれば、シーザーがルビコン川を渡るという出来事によって、「ルビコン川を渡る」という述語を内包した主語「シーザー」が、この現実世界に発生すると解釈できる。しかしこれは、既存の出来事を解釈し直しているに過ぎない。これに対しドゥルーズは、どのようにして出来事は起こるのかを問う。

§ 6

ドゥルーズは「言語において名詞と動詞のどちらが先にあったのか?」という問いに正面から答えるのを避け、言語は出来事によって可能となり、その出来事を名指すのは動詞であると述べている。ただしここでは動詞として人称も時制も態もない不定法が考えられており、正確には〈出来事を名指す動詞的なもの〉とでも呼ぶべき何ものである。原始的な言語ではそもそも動詞と名詞が分化しておらず、「動詞が名詞に先行している」とは言えない。

第 8 章 中動態と自由の哲学——スピノザ

§ 1

スピノザの書いた『ヘブライ語文法綱要』からは、文法研究そのものにスピノザが強い関心を抱いていたことが窺える。

§ 2

スピノザによればヘブライ語の不定法には能動と受動の区別に関わる 6 つのカテゴリーの他に、行為する者と行為を受ける者が 1 つの同じ人物である場合を表す 7 つ目の形態がある。これは内在原因を表すものであり、中動態に通ずるものである。

§ 3

アガンベンによれば、スピノザの神を定義する内在原因とは原因が結果において自らの力を表現するという事態を指す。

『エティカ』では受動態に活用した動詞 *afficitur* がしばしば「Desu *afficitur* + 奪格の名詞 (by)」という構文で用いられている。しかし「神の外側には何もない」のだから、これを「神が…によって刺激ないし影響を受ける」という受動の意味で理解することはできない。ここでの *afficitur* は中動態で、「なる」という自動詞の意味をもち、スピノザの神が自らを刺激しつつ、刺激を受けることである状態へと生成するという中動態的な過程を表す。スピノザが構想する世界は中動態だけがある世界である。

§ 4

「能動 *actio*」と「受動 *passio*」という用語は『エチカ』の重要なキーワードであり、端的に言って、「能動」は目指すべきもの、「受動」は斥けるべきものに他ならない。しかし能動態と受動態という区別では神すなわち自然そのものをうまく描き出せない。では『エチカ』における「能動」と「受動」とは何を意味するのだろうか。

様態は神という実態の変状だから、神の本性によって説明できるという意味では能動である。他方、個物はたえず他の個物から刺激や影響を受けながら存在しており、このような状態が被る変状は受動であるとしか考えられない。しかしこのように能動と受動が単に視点の違いに還元されるなら、能動を目指すべき状態、受動を斥けるべき状態として提示することに意味がなくなってしまう。

§ 5

様態の上に起こる変状は一見すると受動的だが、実際には次の 2 段階から成る。

1. 外部の原因が様態に作用する段階 ↔ (中動態に対立する意味での) 能動態
2. 様態を座とする変状の過程が開始する段階 ↔ 中動態

§ 6

そして能動と受動とは、この第2段階における変状の質の差を意味する：

- 能動 ≡ われわれの変状がわれわれの本質を十分に表現している。
- 受動 ≡ 個体の本質が外部からの刺激によって圧倒されてしまっている。

§ 7

われわれは純粋な能動になることはできないが、受動の部分を減らし、能動の部分を増やすことはできる。われわれのものと起こる変状は、外部からの刺激だけでなく、われわれ自身の〈変状する能力〉にも依存しているのだから。

§ 8

能動と受動はそれぞれ、スピノザ哲学において自由と強制に言い換えられる：

- 自由 ≡ 自己の本性の必然性に基づいて行為すること。
- 強制 ≡ 自らの有する必然的な法則を踏みにじられていること。

それならば自由であるためには自らを貫く必然的な法則を認識することが求められる。ここで

- 自由がスピノザの言うように認識によってもたらされるのであれば、自由意志を信仰することこそ、われわれが自由になる道をふさいでしまうとすら言わねばならない。その信仰はありもしない純粋な始まりを信じることを強い、われわれが物事をありのままに認識することを妨げるからである。
- 自らを貫く必然的な法則が人それぞれである以上、自由になるための道筋も、一人一人で異なる具体的なものになる。

第9章 ビリーたちの物語

最後に能動と受動、行為や意志や責任の概念を再考せざるを得ない文学作品として、ハーマン・メルヴィルの小説『ビリー・バッド』が取り上げられている。吃音という障害を抱えるビリーは身体の、過去のいきさつから嫉妬を制御できないクラッガードは感情の、そして社会的責任を過剰に問われる立場にあるヴィアは歴史の、それぞれ奴隷である。しかし彼らは完全に操られていたのではなく、中動態の世界を生きていたというほかない。

第Ⅱ部

節レベルの要約

第7章、第8章の各節の要約は本稿の第Ⅰ部で行ったため、ここでは扱わない。第9章の要約はここでも省略する。

第1章 能動と受動をめぐる諸問題

§ 3, § 4 注目ポイント

- p.26 能動・意志 ↔ 責任
「人は能動的であったから責任を負わされるというよりも、責任あるものと見なしてよいと判断されたときに、能動的であったと解釈されるということである。意志を有していたから責任を負わされるのではない。責任を負わせてよいと判断された瞬間に、意志の概念が突如出現する。」
－ 小坂井『責任という虚構』p.157でも同様の趣旨のことが述べられている。
- p.29 「意志など幻想」は能天気
『意志など幻想だし、意志の概念に基づいた能動と受動の区別もまやかした』などと主張する者は端的に能天気である。その人物は、自らがこの概念や区別にすがらずにはいられなくなる場面が訪れるかもしれないことを想像できていないだけである。」
- pp.31-32 「スピノザは意志の自由を否定したのであって、(中略)意志は効果としては残ると考えていた。」

第2章 中動態という古名

§ 2

アリストテレスは『カテゴリー論』において、文を構成する要素を以下の10個のカテゴリーに分類した。

- (1)–(6) : 名詞の形態に対応
(1) 実体, (2) 「どれだけか」〔量〕, (3) 「どのようなか」〔質〕, (4) 「何と比べてか」〔関係〕, (5) 「どこでか」〔場所〕, (6) 「いつか」〔時〕
- (7)–(10) : 動詞の形態に対応
 - － (7) 「どんな姿勢か」〔姿勢〕 ↔ 中動態
 - － (8) 「どんな状態か」〔状態〕 ↔ 中動態完了形
 - － (9) 「なすか」〔能動〕 ↔ 能動態
 - － (10) 「蒙るか」〔受動〕 ↔ 受動態

ここから当時は

能動態 vs 中動態 → 能動態 vs 受動態

の移行期にあったことがうかがえる。

§ 3

ストア派は動詞を「能動態他動詞」「受動態」「中性」に分類した。「中性」の定義は不明瞭で、その他の扱いである。

§ 5

アンダーセンはエネルゲイアとパトスを「能動」および「受動」ではなく

エネルゲイア → 遂行すること
パトス → 経験すること

と翻訳することを唱え、ギリシア語にあるのは

エネルゲイア ↔ 能動態
パトス ↔ 中動態

の活用のみであるとし、メソテースは例外を指すと考えた。このようにアンダーセンはパトスが中動態であるとし、これが時に受動の意味をもつと見ている。これが可能なのはギリシア語において受動の意味と中動の意味が1つの形態に同居しているからである。

§ 6

実際、『テクネー』がパトスの例として挙げる *τύπτομαι* (テュプトマイ) は「打たれる」という受動の意味だけでなく、「自分の体を叩いて」という再帰的な意味や「悼んで」のような意味もちうることをアンダーセンは指摘した。

§ 7

『テクネー』に掲げられているメソテースの4つの例は以下のようにエネルゲイアとパトスの対立ではうまく説明できない、活用と意味がズレた例である。

- 「pépēga [私は[そこに]留まっている]」「diéphthora [私は正気を失っている]」
 - － 能動態に活用しているけれども完了時制に置かれており、主語がある状態であり続けるという能動とは異なる意味をもつ。
 - － アンダーセンによれば能動態は遂行を表すにも関わらず (§ 5), これらは経験を表すという意味で規則に対する例外である。
- 「epoiēsámēn [私は自分のために[何かを]つくった]」「egrapsámēn [私は自分のために文書を書いた]」
 - － 中動態に活用している。しかし意味は能動であり、主語がその行為を自らのためになすことを表していると言えるかもしれない。
 - － アンダーセンによれば中動態は経験を表すにも関わらず (§ 5), これらは遂行を表すという意味で規則に対する例外である。

§ 8

後世の学者たちによる『テクネー』の解釈は「誤読」であるとするアンダーセンの仮説は「十分ありうる」。いずれにせよ能動態と中動態の対立が能動態と受動態の対立に取って代わられていく歴史的变化が意識されず、『テクネー』が能動と受動を対立させるパースペクティブから翻訳、解釈されるそのたびごとに能動態と受動態の対立が活性化されてきたことには変わらない。

エネルギーを「遂行」、パトスを「経験」と翻訳し、これを能動態と中動態の対立に重ねるアンダーセンの解釈は、『テクネー』を解釈するうえでは十分かもしれない。しかし中動態に活用した動詞は物事の遂行をも意味するため、能動態と中動態の対立そのものの解釈としては十分ではない。

第3章 中動態の意味論

§ 1

中動態は「能動態でも受動態でもない」という説明に安住しては中動態が神秘化され、かえって能動と受動の対立が強化されてしまう。そこで中動態を積極的に概念化しよう。

§ 2

中動態は「馬を（自分がこれから乗るために）つなぎから外す」のように、「問題となる行為を主語が自らのために為す」とか「主語の利害関心に関係している」と定義される。中動態の定義がこのような奇妙なものになってしまうのは、かつては中動態が能動態と対立するパースペクティブのなかで位置づけられていたにも関わらず、われわれが能動対受動というパースペクティブに浸かってしまっているためである。

§ 3

中動態と対立していたときの能動態は現在のパースペクティブにおける能動態と同一視できないはずである。言語学者アランが比較検討している研究者たちの中動態の定義のうち、能動対受動というパースペクティブを括弧に入れ、能動態を再定義しつつそれとの対立において中動態を定義しているのはバンヴェニストによる次の定義だけである。

「能動では、動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程を指し示している。これに対立する態である中動では、動詞は主語がその座となるような過程を表している。つまり、主語は過程の内部にある」（バンヴェニスト、1966年）。

§ 4

注目ポイント pp.85–86

中動態を失ったラテン語では中動態によってしか表せない観念を形式所相動詞が担っていると考えられる。（注目ポイント終わり）

バンヴェニストは以下のような、中動態しかとらない動詞と能動態しかとらない動詞を集めて、上記の定義にたどり着いた。ここでサ、ギ、ラ、アはそれぞれサンスクリット語、ギリシア語、ラテン語、アヴェスタ語を意味する。アクセントを上手く表示できないギリシア文字等は赤字で示した。

- 能動態のみのもの (= 主語が過程の外にある)
 - － 曲げる (サ. bhujati ギ. *φεύγει*), 与える (サ. dadāti ラ. dat)
 - － 食べる (サ. atti ギ. *ἐδελ*), 飲む (サ. pibati ラ. bibit)
 - * 食べたり飲んだりしたものは (消化されるというよりも) 主語が占めている場所とは別のところに消え去ってしまう、と考える。
 - － 行く (サ. gachati ギ. *βαίνει*), 風が吹く (サ. vāti ギ. *αησι*), 流れる (サ. sravati ギ. *ρεῖ*), 這う (サ. sarpati ギ. *ερπει*)
 - * 主語のもとと占めていた場所の外で動作が完結する。
 - － 在る (サ. asti ギ. *εσσι*), 生きる (サ. jīvati ラ. vivit)
 - * これらが能動態しかとらないということは、これらは主体の関与が必要とはされない過程と見なされていたことになる。
 - 言わば、主体は蔑ろにされている。
- 中動態のみのもの (= 主語が過程の内にある)
 - － できあがる (ギ. *δύναμαι*), 欲する (ギ. *βούλομαι*), 惚れ込む (ギ. *εραμαι*), 相手に畏敬の念を抱き自らを恥じる (ギ. *αἰδομαι*), 畏敬の念を抱く (ギ. *αζομαι*), 希望する (ギ. *ελομαι*)
 - － 生まれる (ギ. *γίγνομαι* ラ. nascor), 死ぬ (サ. mriyate marate ラ. morior), 続いてくる (サ. sacate ラ. sequor), わが物とする (ア. xšayete ギ. *κτάομαι* サ. patyate ラ. potior), 寝ている (サ. śete ギ. *κειμαι*), 座っている (サ. āste ギ. *ημαι*)
 - * 主語〔主体〕は、主語のなかで成し遂げられる何ごとかを成し遂げる。

§ 5

バンヴェニストによる「主語が動詞によって示される過程の内にある」という中動態の定義は、「動詞は主語に作用する」、「主語の利害関心が問題になる」という中動態の一般的な定義を含んでいる。

§ 6

「負かされた状態にある」という意味の中動態に活用している *νικᾶσθαι* (ニカスタイ) に「誰それのもとで」という表現を足すと、「誰それによって負かされた」と読める。このようにして中動態から受動態が派生してきたと古典学者シャルル・ギローは説明する。

『テクネー』においてメソテースの例として挙げられている4つの動詞は、最初の2つが能動態の完了形、残りの2つが中動態であった(第3章§ 4, § 7)。これらの意味はいずれもバンヴェニストの定義によれば中動態的である。

§ 7

「中動態」という古名は主語が過程のなかにあるという本来の定義を表すものではないけれど、中動態が受動態に取って代わられた後に正式に名前を与えられたという歴史を反映している。

能動態と中動態を対立させるかつての言語では意志が前景化しない。

第4章 言語と思考

§ 1

能動態と中動態を対立させるパースペクティブが残存していたギリシア世界には、意志の概念が存在しなかった。この事実は、能動と受動というわれわれの思考の奥深くで働く対立を、能動態と受動態という文法上の対立が生み出す効果として考えようとする試みの妥当性を裏付けてくれるものと思われる。

§ 2

言語と思考の関係を理解するうえでバンヴェニストの論文「思考の範疇と言語の範疇」とこれに対するデリダの批判に注目する。

§ 3, § 4, § 5 (デリダの3つの批判)

- アリストテレス研究史への参照の不備について (§ 3)
 - － バンヴェニストはアリストテレスの掲げる 10 のカテゴリー (第2章§ 2) がギリシア語文法の名詞および動詞の体系と平行関係にあることを指摘した。
 - － しかし、そのような指摘は以前から提示されていた。
 - － 「態勢」のカテゴリーを中動態に相当するものと解釈した点は新奇性がある*1。
- 言語と思考の関係について (§ 4)
 - － 「思考の可能性は、言語能力に結びついている」というバンヴェニストの主張は思考を言語に還元しているようであり、バンヴェニストが一方で「思考の発展は、言語の個別の性質よりも、人間の能力、文化の一般的条件、社会の組織体制の方にはるかに緊密に結びついている」と述べていることに矛盾しているように見える。
 - － しかしバンヴェニストは言語が思考を規定するのではなく、あくまで思考の可能性を規定すると述べているのであり、これは言語が思考に作用する場である「人間の能力」「文化の一般的条件」「社会の組織体制」に思考が結びついていることとむしろ整合する。
- 「存在」あるいは動詞「在る」について (§ 5)
 - － 古代ギリシアで始まった哲学が存在を問うてきたのは、存在に相当する語を容易に客体化できるギリシア語の独自性と切り離せないとバンヴェニストは主張した。
 - － バンヴェニストには「在る」という動詞を根元的なものとみなしたいというハイデggerに通ずる欲望が見出だされる点をデリダは批判しているけれども、これは見当違いの言いがかりとなって

*1 「態勢」とは第2章§ 2の(7)「姿勢」のことか。

いる。

- － バンヴェニストの議論はハイデッガーの議論と平行性がある点をデリダは批判しているけれども、これは問題にならない。

言語と思考とが関係し、中動態の抑圧がいまに至る哲学の起源にある可能性について、デリダは(何の根拠も示さずに)次のように断定している。

おそらく哲学は、このような中動態，すなわちある種の非-他動詞性をまず能動態と受動態へと振り分け、それを抑圧することで自らを構成したのである。

これはバンヴェニストが主張していた仮説に他ならない。

第5章 意志と選択

§ 1

哲学者アレントは「何も考えていない thoughtlessness」ように見える人物アイヒマンがホロコーストに荷担したことに衝撃を受け、『精神の生活』を書いた。その第2部ではアリストテレスの哲学が最重要視されている。古代ギリシアは意志の概念を知らず、アリストテレスは意志概念の欠落を意識していた。

§ 2

人の行為を理性と欲望だけで説明しようとする、「無自制」という状態において人は欲望に基づくという意味ではやりたいことをしているのに、理性に反するという意味ではやりたいことをしていないという矛盾に陥る。アリストテレスは行為の端緒(アルケー)として「選択(プロアイレシス)」の概念を導入し、無自制はプロアイレシスが理性よりも欲望により強く影響されて成立している状態と考えてこの矛盾を解消した。

§ 3

ただしアレントによればプロアイレシスは理性の指導や欲望の誘いに基づき選択する能力であって、意志すなわち自発的・自律的に何かを始める能力ではない(これは「自由意志」と翻訳される「リベルム・アルビトリウム liberum arbitrium」についても同様である)：

選択……過去の帰結
← プロアイレシス，リベルム・アルビトリウム，
意志……過去を断ち切る概念。

§ 4

選択……過去の要素の影響の総合。

不断に行われている。

意志……選択を過去から切り離そうとする概念。

責任を問うとき、選択の開始地点を確定するために呼び出される(選択に取り憑く)。

[※言葉の定義に文句を言っても仕方ないけれども、このように過去の帰結として現れる行為をあえて選択と呼ぶことには抵抗を感じる.]

(選択の定義より) 選択が意識される前に脳内で何らかの活動が始まっているのは当然であるにも関わらず、選択が意志にすり替えられ、「意志など幻想だ」と言われる。

[※この議論は意志が幻想であることを否定するものではない.]

意志の概念を斥けても意識や選択が無意識によって一方的に決定されていることにはならず、意識は選択に影響を与えうる無数の要素の1つと考えられる。

§ 5

意志は過去から切断された絶対的な始まりとするアレントの定義を見れば、意志概念を哲学的に擁護することは困難であることが分かる。ところがアレントは絶対的な始まりとしての意志を擁護し、意志を批判してきた哲学を全面否定し、意志は理性から定言命法というガイドを受けとるとするカントの倫理学をも否定する。

§ 6

アリストテレスはプロアイレシス (選択) の概念を作り、「自発的」行為と「非自発的」行為とを区別した。

アレントはカツアゲの事例を取り上げ、銃で脅された人物がお金を相手に渡すことはアリストテレスの定義によれば自発的な行為と見なされてしまうだろうと述べる。銃で脅されているとはいえ、お金を取り出し相手に渡すことは物理的には強制されておらず、その運動の起源は行為者のなかにあるからである。

§ 7

フーコーの権力論において権力と暴力は次のように区別される：

権力……相手の行為する力を利用する

暴力……行為する力そのものを抑え込む

相手を服従させある行為をさせるのは権力の行使に当たり、カツアゲの事例のように相手にはある程度の「能動性」が残されていることが必要である。一方、暴力の行使は例えば、相手に便所掃除をさせるために相手の手にブラシをもたせ、その手をつかんで動かすことに相当する。

§ 8

権力を行使される側に見出だされるある種の「能動性」は、いわゆる受動性として理解できないのはもちろんのこと、いわゆる能動性としても理解できず、「する」と「される」の対立で説明することはできない。これはむしろ能動性と中動性を対立させる立場から説明できる。すなわち権力を行使する者は権力によって相手を行為させるのだから、行為のプロセスの外にいる。これは中動性に対立する意味での能動性に該当する。一方、権力によって行為させられる側は、行為プロセスの内にいるのだから中動的である。

§ 9

アレントは権力と暴力を次のように区別する：

権力……一致して行為する人間の能力に対応する。

暴力……「道具の使用」によって特長づけられる。

人間が一致して行為することをもたらしえない。

そして「一致」(同意)を自発的なものとして考えるアレントにとって、カツアゲにおける銃身から生じた一致(同意)は一致(同意)ではなく、カツアゲの事例は暴力の事例であることになる。

§ 10

しかしカツアゲの事例をはじめとして非自発的な同意は日常にありふれている：

「友達がソバにしようというので仕方なくソバにする」。

「子供が泣きわめくので仕方なくお菓子を買ってやる」。

「給料がほしいので仕方なく働く」。

能動と中動の対立を用いれば、こうした事態はたやすく記述できる。

§ 11

非自発的な同意を行為の種類から排除すると、ある同意に関して「同意したのだから自発的であったのだ」と見なされてしまう可能性(危険性)が出てくる。実際には意志の存在は哲学的に支持できず、純粋に自発的な同意はありえない。

自発的な一致の可能性はアレントにとって、この暗い世の中での政治的生活がもちうる唯一の希望であったのかもしれない。しかし人間の純粋な意志や自発性がなきとも、複数人いる人間たちが一致をつくりだすプロセスに参加できればよい。

第6章 言語の歴史

§ 1

動詞は言語のなかに遅れて生じてきた要素であり、動作を表す抽象名詞によって、名詞文という形で構文が形成される時代がまずあった。これはラテン語、古典ギリシア語サンスクリット語などの共通の起源である「共通基語」以前の時代のことである。確かに以下のような、名詞的構文の「化石的構文」が見出される：

- ラテン語の「発展期」の喜劇作家プラウトゥスの文例。
「話をする」ということを表現するのに「話をする narro」という動詞を用いず、「話 narratio」という名詞を用いて「話がある」と表現。
- ラテン語の動詞の「スピーヌム」と呼ばれる形態。
もともとは動作を示す名詞だった。

§ 2

動作名詞から発生した原始的形態の動詞は行為者を指示することなく動作や出来事だけを指し示すもので、“It rains”のような非人称構文は動詞の最古の形態を伝えるものと考えられる。

§ 3

ラテン語において意味が中動態と強く結びついていた動詞は、能動態と受動態を対立させるパースペクティブが支配的になる過程でその枠組みのなかにうまく入り込むことができず、形式所相動詞としてはじき出された。形式所相動詞は一般に「受動態の変化形式しかもたないが意味は能動の動詞」と説明され、arbitror (判断する), auspicor (鳥占いする), conspicio (認める), medicor (癒す), meditor (思う), opinor (考える) などがある。

また、中動態を失ったラテン語では能動態に活用した動詞の目的語に動作主本人を置き、中動態が担っていた意味を表現する再帰的表現が開発された。

§ 4

以上を踏まえると、言語の歴史は次のような段階を経てきたと憶測できる。

- 名詞的構文
- 非人称形態の動詞
出来事そのものを記述
- 人称を獲得した動詞
行為や状態を主語に結びつける発想の基礎
- 能動態と中動態の対立
行為者が動作プロセスの内側にいるのか外側にいるのかを問う
- 能動態と受動態の対立
行為者が自分でやったのかを問う

これは出来事を描写する言語から、行為者を確定する言語への移行として捉えられる。もっと言えば、本来多くの要素が参与して成り立っている行為を行為者の意志に帰属させる言語への移行である。

§ 5

英文学者の細江はインド＝ヨーロッパ諸語と日本語における動詞の変遷を比較し、両者が中動態を共有し、中動態が他の形態へと「分岐」する様までも共通していたことを指摘した。

以下の例のように中動態から自動詞的な意味と受動態の意味が生じることを細江は指摘した。

- サンスクリット語, namate (中動態) …… “he bends himself”

$$\rightarrow \begin{cases} \text{“he bows” (自動詞)} \\ \text{“he is bent” (受動態)} \end{cases}$$

- ギリシア語, *φαίνομαι* (中動態) …… “I show myself”

$$\rightarrow \begin{cases} \text{“I appear” (自動詞)} \\ \text{“I am shown” (受動態)} \end{cases}$$

また細江は以下のように能動態との関係において中動態を、中動態との関係において能動態を定義しており、細江の定義はバンヴェニストのそれに近似している。

「過向性能相」(能動態) …… 「動作が甲より出て乙に過向し、その乙を処分することを表す」。
 「不過向性能相」「反照性能相」(中動態) …… 「動作が行為者を去らずその影響は何らかの形式において
 行為者自身に反照する性質のもの」を表す。

§ 6

自動詞表現と能動態表現はともに中動態から導き出され、非常に近い意味をもつにも関わらず、能動対受動の対立図式のなかに持ち込まれ、「その行為を誰に帰属させるべきか？」という尋問を受けると能動態と受動態として対立してしまう。

ここで能動態は受動態と相互に書き換え可能なものと考えてはならない。実際、受動態で書かれた文の8割は前置詞 *by* による行為者の明示を欠いており、これを前置詞 *by* を用いた能動態表現の書き換えと見なすことはできない。

日本語においても自動詞と受動態は密接な関係にある：

「生まる」……「生む」の受動態。自動詞としての意味をもつ。

「見える」……自動詞。

受動態を用い “which is seen” や “which is to be seen” と翻訳される意味をもつ。

← 「見える」の文語「見ゆ」が、一般に語尾「ゆ」が、

自動詞と受動態の意味をそこから導出できる中動態の意味を担っていたと考えられる。

語尾に「ゆ」をもつ動詞は自動詞を生み、受動態よりも先に自発（「自然の勢い」）の意味が生じ、ここから可能と尊敬の意味が発達したと細江は考える。こうして

「ゆ」 → 「ゆ」「らゆ」 → 「れる」「られる」

と分岐・変化して得られた助動詞「れる」「られる」は受動・可能・自発・尊敬の意味をもつことになる。

§ 7

細江は「自動詞」と「自然の勢い」の関係を明確にしないまま、「自然の勢い」を「自動詞」の後に位置づけている。細江の言う「自動詞」が「自動詞的な意味」を指しているのだとすればそれは中動態から出てきたものとは言えず、むしろ中動態がもとからもっていた意味と考えられ、形態としての自動詞を指しているのだとすれば意味を指している「自然の勢い」と並べて順序を考えることはできない*2。

*2 § 8で触れられるように、細江が「自動詞」という言葉をここに加えたかった理由は、細江が中動態から自動詞、他動詞、使役表現が発生することを法則として提示しようとしているからである。

「自然の勢い」が中動態の意味の根底にあり、主語が座となる過程を実現する力の度合いによって中動態の意味が次のように区別されれば問題は解決する。

自動詞表現が担う意味……淡白な力の実現 (例「かがむ」)

自発……非常に強い力がゆっくりと、しかし着実に過程を実現する場合

(例「昔が偲ばれる」)

受動態で表現される意味……過程を実現する力と (主語 = 主体) の間に明確な区別が見出される場合

可能……過程を実現する力の強さと主語の結びつきが強調される場合

§ 8

細江は日本語において、能動態の動詞に語尾「ゆ」がついて中動態が発生したという説を唱えた。しかし中動態から自動詞や他動詞、使役表現が派生可能であることから、逆に能動態に先行して中動態が存在したと考え、次のように言語の歴史を憶測することもできるだろう。

1. 名詞

→ 非人称動詞 (出来事を単に出来事として名指す (≡ 自然の勢い))

→ 中動態 (自然の勢い)

2. 中動態 → 能動態

3. 中動態 → 受動態

4. 能動態と受動態の対立

中動態の抑圧、消失

自動詞、再帰表現、使役表現等々へ継承

ここで矢印は発達、派生を表す。

§ 9

以下のように中動態という“抑圧されたもの”の回帰として捉えられる表現が存在する。

● 自動詞の意味を受動態で表現

– “I am married to her” [私は彼女と結婚している]

– “I am engaged in political activities” [私は政治活動に携わっている]

– “The ship was wrecked” [船が難破した]

– “The soldiers were wounded” [兵士たちは負傷した]

● 受動不定詞

– “I am to blame” [非難されるべきは私だ]

blame が非難される状態を示す自動詞であるかのように用いられる。

– “house to let” [貸し家]

let が貸されている状態を示す自動詞であるかのように用いられる。

● 「能動受動態」または「中間構文」……他動詞が自動詞のように用いられる。

– “Your translation reads well” [君の翻訳は読みやすい]

- “Peace sells... But who’s buying?” [平和が売れている…しかし買っているのは誰なのか？]
- “This camera handles easily” [このカメラは使いやすい]
- “The door shuts easily” [そのドアは簡単に閉まる]
- “The paper feels rough” [この紙はざらざらした感触だ]

第 III 部

付録 Spinoza 描像

本稿では自然科学 (とりわけ物理学) と相性が良い Spinoza の哲学について、科学との関係を整理しつつまとめる。また Spinoza 的な描像の主要な帰結・含意として、「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」の二点を簡潔に議論する (図 2 参照)。

Spinoza の思想はその代名詞と呼べる「神即自然」という標語に端的に表されている。ここで神とは世界の外部から世界に働きかける人格を持った存在ではなく、むしろこの世界そのものであり、それ故、神即自然と呼ばれる。そして Spinoza によれば、あらゆる事物は神の「現れ」であって、神の内なる必然性に従って生起しているとされる。このような考え方は汎神論と呼ばれ、少なくとも自然科学が対象とする物理的世界に関して言えば、万物は自然法則に従って振舞うという自然観と重なる。この限りで神の必然性とは、自然法則ないしその原理としての物理そのものと同一視し得る。(そしてこのことは私を含め、Spinoza に共鳴する一部の者にとって、間違いなく物理学理論を学ぶ一つの大きな原動力となってきた。) また人間を含め自然物は与えられた目的のために存在・活動するという考えを、Spinoza は偏見として退けている。この点もやはり、目的因よりもむしろ機械論的因果律による現象の理解を試みる自然科学的な姿勢に通じる：鳥は空を飛ぶために羽があるのではなく、羽があるから空を飛べるのである。さらに精神と物体は異質な存在であるため、その相互作用を考えることはできない。しかし我々は心と身体の状態に関連性があることを経験的に知っている。これは Spinoza 哲学において、それらが同一の神の異なる二つの側面を表しているからであると説明される。このように精神的な出来事と身体的 (物理的) な出来事は互いに対応しているけれども、それらはあくまで独立に

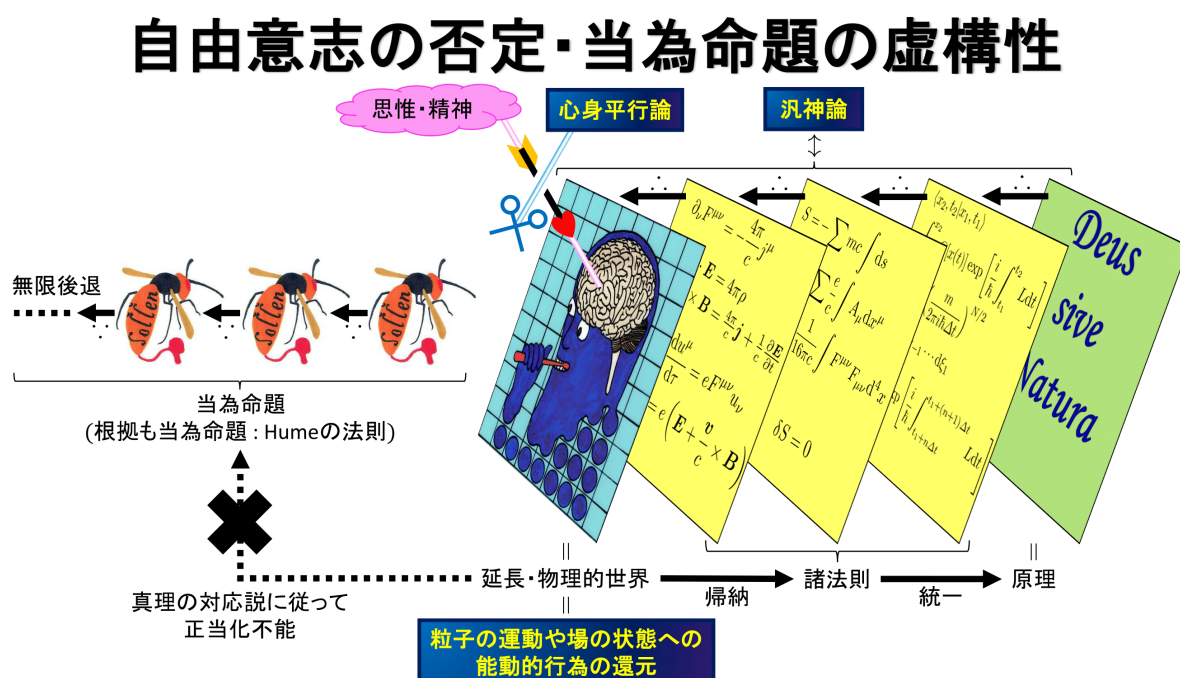


図 2 「Spinoza 描像」は「自由意志の否定」と「当為命題の虚構性」を二大柱としてこの図のように要約される。図の右半分が「自由意志の否定」に、左半分が「当為命題の虚構性」に対応する。

進行するという説は心身平行論と呼ばれる。これは物理現象がそれ自体で閉じており、そこに精神の作用が介入する余地はないとする自然科学の想定と整合する。(なお心身平行論を採用すれば、いかにして物質に過ぎない脳から意識が生まれるのかという、脳・神経科学に付きまとう形而上学的な難題も回避できる。)

以上のように、Spinoza 哲学と自然科学の世界観は整合的である。しかしながら Spinoza の思想は彼の主著『エチカ』において、定義や要請、公理から出発して定理を演繹する、いわゆる「幾何学的方法」で「論証」されており、それ故それは数学同様、頭の中で完結している。現に Spinoza の汎神論は、神の必然性に相当する物理の具体的な詳細——決定論的であれ非決定論的であれ——に依らずに理解できる (Spinoza のオリジナルの自然観は決定論的である)。これは Spinoza 哲学が実験や観察によって反証できず、形而上学の域を出ないことを意味する。他方で経験科学は現実世界について語り得るものの、帰納的推論の産物であるため絶対確実な知識ではあり得ず、やはり形而上学的な命題の正しさを証明することはできない。むしろ Spinoza が描くような形而上学的な直観が、物理学をはじめとする自然科学が依拠する前提を成していると言った方が正確である。

次に Spinoza のパラダイムは—— Spinoza 自身がはっきりと述べているように——人間の自由意志を否定することを説明する。ここで自由意志とは、因果律の連鎖または物理法則の支配を断ち切り、純粋に自発的な行動を引き起こす超自然的な精神の作用として定義できる。言い換えれば自由意志とは言わば無からの創造であり、不可能を可能にするという自己矛盾であり、その定義により虚構に他ならないことが明らかである。実際 Spinoza が主張するように、一切は神の必然性によって完全に決定されており、また精神は身体に影響を及ぼさないならば、自由意志は存在し得ない。また人間も自然の一部であって、神の現れであるならば、自由意志を行使し得る行為の主体ははじめから存在しないことになる。これは一見すると能動的・主体的な人間の行為も、渾然一体とした単なる物理的な出来事 (例えばミクロな粒子の運動や場の時間変化) から成るという、要素還元論的な見方に対応する。さらに量子力学の描くような非決定論的な自然観を導入しても、自由意志を救うことにはならないことに注意しよう。なるほど、「決定論が正しければ自由意志は存在しない」という伝統的な議論は分かりやすい。ただしこの命題の裏も成り立つとは限らない。実際、事物がランダムに確率的に生起するとしても、人は世界のなすがままに振り回されてしまうのであれば、我々はそこにも自由意志を見出せないだろう。

自由意志は存在しないと主張することは、露悪的だという印象を与えかねない。とは言え人は時として、このことを括弧に入れて考えることが許されないような、差し迫った苦境に陥ることも確かである。そのような人生の局面の象徴的な例として、受験勉強が挙げられる。勉強しなくてはいけないと思いつつもやる気が出ず、一向に行動を起こせないという金縛りのような無気力状態を、誰しも少なからず経験したことがあるだろう。このときもし意志の力で言うことを聞かない身体を強制的に行動へと駆り立てられるならば、それは無気力の中でも自由に発動させることができる精神の能力、すなわち自由意志でなければならない。ところが自由意志は存在しない以上、意志を抱くことや努力することは、それが神即自然の必然性に従って自動的に達成されない場合には絶対に不可能である。このような認識は必ずしも状況の解決には役立たないものの、思うに真なる認識であって、それを安易に無視することはかえって「無責任」な言動や実践に繋がりがかねない。現代社会を伏流している新自由主義的な自己責任論のイデオロギーもその例外ではなく、それは本来、哲学的に正当化し得ないということも、ここで強調しておきたい。

最後に事実と価値の対立について論じる。一般に「……べきだ」という形に帰着できる、規範を表す命題を当為命題という。受験勉強をすべきとされながらもそれができない先の受験生の例は、自由意志なき世界では、我々がしばしば相容れない事実と当為の間で否応なく引き裂かれる運命にあることを示している。またそれ以前に、当為命題はいかに論理で武装しようとも、恣意性・無根拠性を免れないということも言える。その

理由は次のようにまとめられる。まず素朴に理解できるように、自然にはもともと絶対的な善悪の区別は存在しない。(これは Spinoza の採る立場であると同時に、科学が自明視する暗黙の了解でもある。) このため当為命題は事実命題だけからは導けない(このことは Hume の法則と呼ばれる)。しかるに、ある当為命題を導く論理が循環論法や無限後退に陥らないためには、何らかの前提条件を出発点として認めなければならない。よってこの前提条件にもまた、何らかの当為命題が含まれることになる。再び Hume の法則より、この当為命題は単に現実世界との一致・不一致に基づいて真偽を判断できるものではないため、無条件に認めることを強いられる。以上よりあらゆる当為命題は独断論であることを免れない。ただし——ここが重要だが——「こうあるべき」とは言えずとも、事実として「こうあってほしい(と思っている)」と述べる分には間違いにならない。このことを踏まえてはじめて、我々は普遍的な「正義」を求める答のない(擬似)問題と、それをめぐって弁論術を競うだけの表面的な水掛け論を脱し、個々人の気持ちを「感情論」として排除しない、地に足のついた真に倫理的な対話を行うことができる。